

(要約版)

## 嗜好品摂取の心理的・対人関係的機能に関する社会生態学的モデルからの検討

助成研究者 森泉 哲 ((南山大学短期大学部) 社会心理学)

### 1. 研究目的

代表的な嗜好品であるたばこ、酒、コーヒーの摂取に関して、「個人の行動は社会との相互作用である」という立場に依拠する社会生態学的モデルの観点から、嗜好品摂取の心理的・対人関係的機能について検討を行った。特に社会生態学的モデルのうち、本研究ではミクロレベルの友人・家族関係と、メゾレベルである職場環境に限定して検討した。大学生と社会人では異なった社会的環境の下で生活を送っていることが想定されるため、2つの研究を通して嗜好品摂取の心理的・対人関係的機能について検討することとした。

研究1では、大学生を対象として、友人・家族関係の要因(摂取量・頻度、関係の質)と嗜好品摂取動機、摂取量・頻度、ならびに心理的健康との関連について検討した。研究2では、社会人を対象として、職場環境や家族・友人関係の要因と、嗜好品摂取動機や摂取量、職場満足感や主観的幸福感との関連について検討した。

### 2. 研究方法

#### 対象者

研究1では、大学生合計600名(男性311名、女性289名)が調査に参加した。平均年齢は22.18歳( $SD = 1.53$ )であった。内訳は、たばこ146名(男性96名、女性50名)、飲酒227名(男性100名、女性127名)、コーヒー227名(男性115名、女性112名)であった。

研究2では、現在企業に勤務する内勤の社会人を対象とし、調査を実施した。調査参加者は、合計575名(男性291名、女性284名)であり、平均年齢は45.15歳( $SD = 10.22$ )であった。内訳は、喫煙185名(男性97名、女性88名)、飲酒194名(男性96名、女性98名) コーヒー196名(男性98名、女性98名)であった。

#### 手続き

研究1および研究2ともに調査会社に委託して質問紙調査をウェブ上で実施した。調査にあたって、対象者を抽出するスクリーニング調査を実施した。たばこ、酒、コーヒーについて過去1か月間の摂取経験を尋ね、経験ありと回答した嗜好品がある者を本調査の対象とした。本調査では、嗜好品いずれか1品に対して、嗜好品摂取量・頻度、摂取動機、親密な他者(家族、友人、職場等)との関係の質、主観的幸福感等に関して回答を求めた。

### 3. 結果と考察

嗜好品摂取動機と嗜好品摂取頻度・量との関連について、両研究を通して一致した結果が得られた。説明率は相対的に低いものの、嗜好品摂取頻度・量は嗜好品摂取動機（「楽しみ」「社交」「同調」「ストレス対処」）のうち楽しみ及び社交と正の関連があった。一方で、ストレス対処動機は過剰摂取感に正の影響を及ぼしており、必要以上に吸いすぎ・飲みすぎを助長してしまっているというあまり肯定的ではない効果も見出された。

社会生態学的な視点からの結果として、友人関係や家族関係の嗜好品摂取頻度と自身の摂取頻度・量には正の関連が両研究ともに見られた。具体的には、喫煙に関して、大学生では親友や恋人の頻度・量と自身の摂取頻度・量と明確な関連がみられ、また社会人では職場の同僚の頻度と関連があった。これは「ピア効果」として知られている、親密な他者の行動パターンからの影響であることがうかがえる。飲酒に関しては、大学生および社会人ともに、友人よりもさらに親密な関係であると考えられる他者（両親、恋人や配偶者）との相互作用、また友人の人数という友人関係のネットワークサイズに影響を受けていると考えられる。コーヒーに関しては、喫煙や飲酒と異なり、特定の人々の摂取頻度というよりは、友人ネットワークサイズや周囲の雰囲気の影響を受けて摂取していると考えられる。

次に、親密な他者との関係性の良し悪し（関係の質）と嗜好品摂取動機ならびに幸福感との関連については、両研究では類似点と相違点が見出された。類似点としては、親密な他者との良好な関係性は、楽しみないしは社交という動機と正の関連がみられた。さらには、親友や家族との葛藤による否定的な関係性は、ストレス対処のための摂取動機と正の関連がみられ、それは日常生活全般の幸福感とは負の関連が見られた。相違点としては、大学生では関係の質と主観的幸福感には直接の関連が見られず、むしろ嗜好品摂取動機がそれらを媒介するという「嗜好品摂取動機の媒介効果」が見られた。しかし、社会人では嗜好品摂取動機のうち同調動機のみが、主観的幸福感に正の影響を及ぼしており、摂取動機は主観的幸福感に対して影響を及ぼしていなかった。しかし、職場では、嗜好品摂取受容感がストレスレベルを軽減し、職場満足感を高めるという直接的な効果が見られた。

### 4. まとめ

社会生態学的モデルからの本研究結果の結論として、親密な他者からの嗜好品摂取量・関係の質という観点からの影響は、大学生に対しては特に親友からの影響が大きかった。社会人では、主観的な幸福感には直接的な効果がみられないものの、職場関係においては、嗜好品摂取は肯定的な効果が見られた。さらには、葛藤が存在する否定的な関係性においては、相手と調和を図るためという同調動機を介して、心理的安寧を高めるために嗜好品が摂取されていることも見出された。嗜好品に内在している効用的な特徴によりながら嗜好品は摂取されながらも、親密な他者との関係の深さ、幅、質という多面的な関係性に影響を受けて、嗜好品が摂取されていると考えられる。